

会 員を増やすことが学会活性化の評価指標か

学会の会員数の減少が話題になって久しい。資料を調べると、1991年がピークで32,108人。私が初めて理事を任命されたころである。それ以降500人から700人程度が毎年退会し、2011年3月時点で19,674人となっている。IEEE Computer Societyの現会員数、約85,000人、ACMの現会員数、約100,000人。世界規模の学会と比べてとき、情報処理学会の会員数は多いのであろうか、少ないのであろうか。

1992、3年はバブルの崩壊期でもあり、学会が初めて単年度赤字となった年でもあった。学会の赤字解消のため会員数の増加が必要となり、このため、学会の活性化を図る動きがこのころより活発化した。学会運営企画委員会(1991)、部会制検討委員会(1992)、学会活動活性化委員会(第1次、1993)、学会活動活性化委員会(第2次、1994)、将来ビジョン検討委員会(1997)、学会運営検討委員会(2001)が活動し、「平成14年度学会運営に関する検討報告書」、「平成15年度学会運営に関する検討報告書」、最近では「情報処理学会アドバイザリーボードからの提言と情報処理学会としての対応施策について(2009)」等の学会活動の活性化を目指した検討報告がなされている。

これらの活動によりさまざまな提案がなされ、種々の改革が実行され、たくさんの成果が挙げられた。新規会員への入会促進、魅力ある学会誌の編集、研究会活動の自主独立化、論文誌の編集方針の改良、実務家向け論文誌・フォーラムの導入、国際化・標準化の強化等。いろいろ改革が実行されたが、会員数の減少には歯止めがかかっていない。さまざまな改革により学会は活性化されたように見えるが、会員数増加には結びつかない。学会誌1つをとっても内容が充実し、この10年で格段に読みやすく面白くなっているが、会員数の増加にはつながっていない。学会のさまざまな活動を活性化しても、会員数はどんどん減少している。

林 弘 Hiromu HAYASHI

(独)情報通信研究機構

[名誉会員] hayashi@nict.go.jp

1967年東京大学工学部卒業。2000年(株)富士通研究所常務取締役。2008年(独)情報通信研究機構(NICT)監事。本会関係:理事、監事、副会長。2005年功績賞、2006年フェロー、2011年名誉会員。

情報処理学会の役員は現在25名、2年任期で、ほぼ半数が1年ごとに会員選挙で選ばれる。ほとんど役員全員が学会活性化のための仕事を2年間一生懸命行っている。しかしこれら活性化の活動はもともと会員数の増加を目指したものであるから、会員数が増えなければ、役員は満足な仕事をしたことにならず、評価されない。会員数が増えれば良い仕事をしたことになるが、毎年会員数が減少している現状では、良い仕事をしたことにならず、役員は自分の仕事がうまくいかなかったと深く反省する。毎年総会で任期が終わる役員は会員数が減少したため頭

[シニアコラム]

IT好き放題



[No.10]

学会は誰のものか

をさげ、次の役員への引継案件として会員数の増加を目指した学会の活性化をまたもや大きな案件として提案する。

■会員の満足度を学会活性化の指標に

社会がダイナミックに変化しているときは、それに対応して学会を活性化し、日々柔軟に、新しい動きを取り込み学会自身を変えていく。学会のさらなる活性化はどうしても必要である。誰のためか。外から見られる、外へ説明するための学会活性化でなく、会員の喜ぶ学会を目指し、内部の会員のために。研究分野に限ると、最近の研究は、「面白い、ワクワクする研究」が少ないのではないかと。コンピュータの性能はどんどん向上しているが、この能力を使いこなす新しいアプリケーションがまだまだ不足している。新しい社会問題の解決、新しい知識処理、超高速シミュレーションなど。既存研究会を統廃合し、新規研究会をどんどん新設することにより「面白い、ワクワクする研究」を増やして、会員が元気になる環境を整備する。会員の満足度を向上させることを学会の活性化の指標とすべきである。他の分野でも会員が喜べる環境を整えば学会の活性化の目標は達成できる。学会は会員のために存在する。会員を大事にしてこそ学会は活性化する。会員数ばかりに注目するのではなく、活動の中身そのものを見つめることが重要である。(2011年8月15日受付)